

## まえがき

本書は、認知言語学と多くの理論的前提を共有する機能主義的な言語類型論の研究書であるが、機能主義的言語理論の1つである役割指示文法の意味論・統語論の概説とその具体的な適用に加えて、言語類型論を踏まえた日本語の北海道方言の形態統語論の研究、さらに、大規模なデータベースを背景とする定量的な言語類型論の紹介を含んでいる点で類書とは区別される。

認知言語学は、言語理論の視野を意味論、語用論へ広げることによって貢献した生成意味論、格文法を源流として踏まえつつ、1980年代後半から相乗的に提案された言語理論群(概念メタファー理論、フレーム意味論、構文文法、語彙化パターン、認知文法、メンタル・スペース理論、根源的構文文法)の総称であり、文法の存在を認める(穏健的)機能主義者とされる Talmy Givón, Martin Haspelmath, Robert D. Van Valin, Jr., 意味論の通言語的拡張性を重視し、意味記述・文化記述に用いる普遍的メタ言語を提案する Anna Wierzbicka, Cliff Goddard と共に認知・機能主義言語学の主稜線を構成している(上記の「認知・機能主義言語学」の概要については、マイケル・トマセロ(編)『認知・機能言語学』(研究社)が参考になる)。

認知言語学は研究の進展につれて、分析対象の言語は英語から他の言語へ拡大されていったが、例外はあるものの、少数の言語の記述的研究(例: George Lakoff による *There* 構文の研究, Adele Goldberg による英語の項構造構文の研究, Laura A. Janda によるロシア語とチェコ語の与格、具格標識の研究)が初期の段階では中心であったことは否めない。

本書は上述の認識を踏まえて、第2章で、役割指示文法(Van Valin and LaPolla 1997; Van Valin 2005)の動詞意味論と文の統語構造を導入する。役割指示文法は第1章でも述べるように、認知言語学と理論的前提の多くを共有する機能主義的な言語理論であるが、統語的能格言語(例: デイルバル語)、能格型⇔対格型の二分法への回収を拒む対称態言語(例: タガログ語)、文法関係のない言語(例: アチェ語、チュクチ語)、文の主要部(動詞)が項標示を受ける主要部標示言語(例: エスキモー諸語、ラコタ語)を英語と同列に扱う言語理論であり、高い通言語的拡張性を備えている。

第2章で概説する動詞意味論は認知言語学で頻用される「ピリヤードボー

ル／因果連鎖モデル」を一部に含む、より一般的な語義分解モデルである。この語義分解と一般的意味役割としてのマクロロールは第3章で扱う斜格、第5章で扱う使役構文の類型論的変異の記述の前提となる。

第4章は、言語類型論と日本語の方言学の接点を探る研究である。具体的には、第2章で導入した語義分解を一部簡略化した動詞分類を前提として、北海道方言の自発態の逆使役用法を分析する。他動性交替の類型論的研究である Haspelmath(1993)を踏まえて、日本語の方言のみならず、他言語のデータも視野に入れて分析を進めているが、北海道方言の話者を対象とするアンケートに加えて、インターネット上で自発構文の用例を大量に収集している。ブログ、ツイッターによる個人の発信が一般化した現在、方言話者の自然発話データのインターネット上での収集は今後一般化することになる。最後に、北海道方言の自発態の検討を踏まえて、Haspelmath(1993)が提案した逆使役の意味地図(semantic map)の改訂を提案している。

第6～7章は近年急速に研究が進んでいる、大規模なデータベースに基づく定量的な類型論的研究の紹介である。マックス・プランク進化人類学研究所員を中心に編纂され、インターネット上でも公開されている The World Atlas of Language Structures [WALS](Haspelmath et al. (eds.) 2005)の使用法を解説すると共に、①言語のサンプリングの方法、②言語間の距離を算定し、視覚化する方法、③類型論的研究で切り捨てられがちな Rara(少数の言語にのみ見られる文法的特徴)の重要性、④言語類型論と認知言語学、言語進化の関係、にも触れている。

本書の執筆は第1章、第2章、第3章、第5章は中村、第4章は佐々木、第6章、第7章は野瀬が担当した。

最後に、本講座の責任編集者の山梨正明先生から本書執筆の機会を与えて頂き、本書の内容・方向性についての貴重なご助言を頂戴した。山梨先生のガイダンスなしには、認知言語学と機能主義的な言語類型論・方言学の接点という広いテーマを一書にまとめ上げることは叶わなかったであろう。他の編者の方々からも改稿時にコメントを頂いた。くろしお出版の池上達昭氏には、校正作業から完成に至るまで適切な助言・助力を頂いた。とりわけ日本語、英語以外の言語の例文、図版を数多く含む本書の校正作業には大変なご苦勞をおかけしたことと思う。厚く御礼申し上げる次第である。

中村 涉  
佐々木 冠  
野瀬昌彦

## 目次

認知日本語学講座・刊行にあたって	iii
まえがき	v
<b>第1章 序章</b> .....	3
1.1 はじめに	3
1.2 理論的枠組について	7
1.3 第2章以降の本書の構成	9
<b>第2章 文の統語構造と意味構造</b> .....	13
2.1 はじめに	13
2.2 統語構造：品詞	13
2.2.1 認知・機能主義的な品詞論	15
2.2.2 形容詞の有標性	27
2.2.3 日本語の形容動詞	32
2.2.4 まとめ	40
2.3 統語構造：文の構造(層状構造・操作子投射)	41
2.4 意味構造	46
2.4.1 動詞の語彙的アスペクト	46
2.4.2 一回相動詞と程度到達動詞	50
2.4.3 動詞の使役構造	54
2.4.4 動詞の意味の語義分解	57
2.4.4.1 語義分解の構成要素：オペレーター	58
2.4.4.2 語義分解の構成要素：定項述語	59
2.4.4.3 語義分解の構成要素：変項(主題関係)	65
2.5 付加詞と項-付加詞の意味構造	68
2.6 マクロロール(一般的意味役割)	69
2.7 文法関係	79
2.7.1 はじめに	79
2.7.2 特権的統語的項	81

2.7.3	日本語における特権的統語的項	83
2.7.4	特権的項の類型論的多様性	87
2.7.5	まとめ	94
2.8	格標識	96
2.8.1	日本語の格システム	96
2.8.2	「例外的」格フレーム	100
2.8.3	日本語以外の格システム	105
2.8.4	まとめ	109
2.9	終わりに	109
<b>第3章</b>	<b>語彙格の分析</b> .....	<b>111</b>
3.1	はじめに	111
3.2	与格(目標格)標識の分析	115
3.2.1	与格(目標格)標識の類型論：Rice and Kabata(2007)	115
3.2.2	Rice and Kabata(2007)の問題点	122
3.2.3	日本語の与格助詞の位置づけ	125
3.3	具格標識の分析	126
3.3.1	はじめに	126
3.3.2	日本語とロシア語の具格標識の用法	126
3.3.3	朝鮮語の具格標識の用法	134
3.3.4	英語の具格前置詞の用法	137
3.3.5	具格標識の用法の分類	141
3.4	「一時的属性」を表す格標識の言語間比較	147
3.4.1	日本語の「一時的属性」標識	147
3.4.2	他の言語の「一時的属性」標識：フィンランド語	149
3.5	与格標識と具格標識の棲み分け	156
3.6	終わりに	159
<b>第4章</b>	<b>北海道方言における形態的逆使役の類型的位置づけ</b> .....	<b>163</b>
4.1	はじめに	163
4.2	前提となる概念	165
4.2.1	北海道方言	165
4.2.2	逆使役	167

4.2.3	アスペクトと語義分解	170
4.2.4	文法体系における形態法の位置づけ	173
4.3	北海道方言における自発構文	174
4.3.1	形態法	174
4.3.2	自発構文の一用法としての逆使役構文	176
4.3.3	問題提起	179
4.4	2つの調査	181
4.4.1	アンケート調査	181
4.4.2	Yahoo API を使ったインターネット上のデータ収集	185
4.4.2.1	調査概要	185
4.4.2.2	達成アスペクト動詞からの派生の優位	187
4.4.2.3	達成動詞から派生した到達アスペクト自発態の存在	189
4.4.2.4	主語の意味役割	190
4.4.2.5	主語の有生性	193
4.4.2.6	インターネット上の自発構文に関するまとめ	197
4.4.3	到達アスペクト自発態の成立条件と文法体系上の位置づけ	197
4.5	通言語的考察	205
4.6	終わりに	209
第5章	使役構文	213
5.1	はじめに	213
5.2	使役構文の類型論に向けて	219
5.3	使役構文の統語的特性	223
5.3.1	コード化特性	223
5.3.2	行動的特性	227
5.3.2.1	再帰代名詞の先行詞の解釈	228
5.3.2.2	尊敬語の先行詞の解釈	229
5.3.2.3	副詞節の非明示的主語の解釈	230
5.3.2.4	副詞類の修飾対象	231
5.3.2.5	動詞句照応(「そうする」による置換)	231
5.3.2.6	受動化	232
5.3.2.7	まとめ	232
5.4	他の言語の形態的／分析的使役構文の統語的特性	233

5.4.1	トルコ語の形態的使役構文	234
5.4.2	ヒンディ語, マラティ語, カシミール語の形態的使役構文	236
5.4.3	ロマンス諸語の分析的使役構文	240
5.5	終わりに	250
<b>第6章</b>	<b>言語の多様性を探る言語類型論</b>	<b>255</b>
6.1	言語の多様性を見る	255
6.2	世界の言語と文法的多様性	256
6.3	サンプリング	263
6.4	言語が多様であること	265
6.4.1	WALSの基本	266
6.4.2	WALSの応用	269
6.5	多様化した理由を探る	273
6.5.1	意味地図と系統樹	276
6.5.2	意味地図	276
6.5.3	系統図	278
6.6	Raraとは何か	285
6.6.1	Raraを探ることと多様性	286
<b>第7章</b>	<b>進化的視点から見る言語</b>	<b>289</b>
7.1	言語に対する進化的視点	289
7.2	ヒトの進化と言語の多様性	290
7.2.1	人類の移動と言語の伝播	291
7.2.2	人類の移動と語順のヴァリエーション	293
7.2.3	語族と言語の世界分布	298
7.3	言語の発生	301
7.4	認知言語学と言語類型論の連携	304
7.5	最後に	307
<b>参考文献</b>		<b>309</b>
<b>索引</b>		<b>335</b>

# 第1章 序章

## 1.1 はじめに

言語類型論とは、言語の分類及び言語の様々な側面に関する通言語的一般化を扱う言語学の下位分野である。具体的に言えば、①言語形式(音韻論, 形態論, 統語論), ②言語機能(意味論, 語用論), ③言語形式と言語機能の間の対応関係, この3者の普遍性と多様性の記述・説明である。言語類型論の目的は(理論的枠組が何であれ)言語の様々な特徴がランダムなものではなく, 普遍性を保ちつつ, 一定の限度内で変異/変化することを示すことにある。

対照言語学, 方言学は, 言語類型論と対比して論じられることが多いが, これらは重なり合いながらも, 研究の目的・対象が異なっている。対照言語学は分析対象の言語の数が少なく, 西ゲルマン語に属する英語, ドイツ語のように系統的に近い言語が対象となる(例: Hawkins 1986)こともあるが, 日本語と英語のように, 語族の異なる言語が比較の対象となる(例: 池上 1981)こともある<sup>1</sup>。さらに, 比較対象は複数の文法項目にまたがることが多い。対照言語学の主なゴールは, 比較対象の言語群が共有する複数の文法項目の間の共変動(co-variation)を説明することにあるからである。

一方, 比較方言学では, 主にゲルマン語, ロマンズ語を対象として, 多くの研究(例: Kortmann(ed.) 2003; Barbiers et al. 2005; Anderwald 2009; D'Alessandro et al.(eds.) 2012)が蓄積されてきた。日本の伝統的方言学は音韻論, 語彙論に重点があったが, 近年, 態(例: 使役, 逆使役, 可能), 格, テンス・アスペクト・モダリティ, 形容詞・形容動詞, 授受動詞の比較研究も増えている(佐々木他(編) 2006; 工藤(編) 2004, 2007; 日高 2007)。

1 日本語と朝鮮語の名詞節/名詞修飾節, モダリティ, 文法化に関する対照研究に関しては, 堀江・バルデン(2009)及びそこで引用されている諸論文, 例えば, Horie(1997, 2003), 堀江(2003)を挙げることもできる。

## 第2章

# 文の統語構造と意味構造

### 2.1 はじめに

本章は、単文の統語構造、意味構造、文法関係の理論を概説し、前二者を踏まえて、日本語の格システム及び格システムの類型論的変異を記述する。第2節は、文の基本的構成要素である品詞が普遍的な語用論的機能の語彙的コード化の産物であることを示す。第3節は語順が固定している英語、語順が比較的自由な日本語、語順が自由なディールバル語を含む全ての言語に共通して見られる文の統語構造(層状構造・操作子投射)を示す。第4節は、Vendler(1967)の語彙的アスペクトの分類を踏まえた動詞の意味構造(語義分解)を概観し、第5節は動詞の項以外の付加詞、項-付加詞の語義分解を示す。第6節では、個々の動詞に固有の意味構造のスキーマ化の産物であるマクロロール(一般的意味役割)を導入する。第7節は、英語の動詞・助動詞の一致構文と関係代名詞構文を例として、意味役割の区別の限定的中和化から主語(特権的統語的項)が導かれることを示し、特権的項の類別論的変異を解説する。第8節では役割指示文法の動詞意味論と文の層状構造を踏まえた日本語の格システムの記述及びその類型論的拡張を示す。具体的には、まず、最適性理論を援用しつつ、日本語の対格型格システムを導く。次に、二重主語構文の格フレームを記述すると共に、日本語の格システムを導くために提案した制約群のランク替えにより、能格型(例：ウォルビリ語)、動格型(例：バスク語、アチェ語、日本語の喜界島方言)の格システムも記述できることを示す。第9節は結論である。

### 2.2 統語構造：品詞

文が伴う統語的要素には、品詞(統語範疇)、文の構造(句構造)、文法関係の3つがある。統語理論の目的は、様々な文法的現象(例：格標識・一致標

# 第3章

## 語彙格の分析

### 3.1 はじめに

文法格と呼ばれる主格、対格、能格は制約の強弱をランキング形式で表す最適性理論を前提として、前章第8節で次のように定義された。

- (1) a. 主格      少なくとも1つの項が主格標識を取る。
- b. 対格      受動者項は対格標識を取る。
- c. 能格      行為者項は能格標識を取る。

(1a)の定義では、主格標識は動詞の項であれば、意味役割、文法関係に関係なく、付与される可能性がある。実際には、他の格標識付与制約との競合の結果、主格標識の分布は限定されるが、Jakobson(1936/1984)の古典的な洞察の通り、主格標識に固有の意味内容は存在しない。

(1b)は受動者項が常に対格標識を受けることを要求するが、日本語では、最も上位にランクされる(1a)との競合の結果、動詞の項が受動者のみの場合には主格標識を受ける。対格標識の意味的多義性とされるものは、動詞の語義分解における項からマクロロールへのランキングの反映であり、多岐に渡る用法を統合する意味的スキーマとして受動者が存在し、その受動者に対して対格標識を付与する。また、(1c)は、動作者、実行者、経験者を統合する意味的スキーマとして行為者を想定し、その行為者に能格標識を付与する。

他方、動詞の意味構造や文の統語的構造からの自律性が相対的に強い語彙格は、ネットワーク構造を備えた多義的カテゴリーとして分析され、その多様な用法はメタファー・メトニミー等の動機づけを伴う意味拡張の産物として、日本語以外では、ロシア語、チェコ語、ポーランド語で詳細な分析を受けてきた(Janda 1993; Dąbrowska 1997)。

## 第4章

### 北海道方言における

### 形態的逆使役の類型的位置づけ

#### 4.1 はじめに

北海道方言の自発態には非意図，可能，達成アスペクト自動詞の3つの用法がある(各用法の詳細については4.3.2節を参照)。

- (1) 私は御飯が食べらさる。(非意図)
- (2) このペンはよく書かさる。(可能)
- (3) 大きな丸が描かさってる。(到達アスペクト自動詞)

このうち(3)は(4)に示す他動詞文との関係で逆使役構文(anticausative construction)と見なすことができる。

- (4) 誰かが大きな丸を描いた。(他動詞文)

自発構文の用法として逆使役を認めることは北海道方言の研究においてコンセンサスとなっているわけではない。この章で逆使役構文として分析する到達アスペクト自発構文に対しては、「非情物に出現する結果の状態」(山崎1994)又は「非情物主語の到達用法」(円山2007)といった自発構文の主語の特性に着目した名称も与えられている。こうした名称は到達アスペクト自発構文の構文的特徴を反映したもののだが、到達アスペクト自発構文の実際の用例を記述する上で不都合な点もある。

この章では、アンケート調査と面接調査，そして語形収集プログラムを使ってインターネット上から収集したデータをもとに，到達アスペクト自発

# 第5章

## 使役構文

### 5.1 はじめに

使役構文は、ある事象(起因事象)とそれが引き起こすことが伴意／含意される事象(結果事象)という、因果関係で結合される2つの下位事象から構成される複合的事象を表す構文である。使役構文はどの言語でも見られる構文であるが、その形態統語的特性、具体的には、被使役者の格標示及び使役者と被使役者の統語的特性の言語間／言語内変異を記述・説明するため、膨大な研究がこれまで行われてきた。その理由として、使役構文がどの言語にも観察される構文であるという事実に加えて、他の文法現象にも関わる構文であるということが挙げられる。例えば、結果事象を表す基体動詞が自動詞である場合は、使役文が他動詞文になるため、使役構文の研究は他動性の問題(本書の第2章第6節を参照)に直結する。

また、日本語では、起因事象を担う接辞「させ」と結果事象を担う基体動詞の結合がレキシコンでなされるか、統語論でなされるかという問題があるが、この問題は「語彙主義(lexicalism)⇔反語彙主義」という文法モデルの選択に関わる大きな問題である。さらに、複数の動詞が結合して単一の動詞として振る舞う複合述語構文には、日本語では使役構文に加えて願望構文、授受構文、連鎖動詞構文があるが、複合述語構文のリンキングを考える際に使役構文のリンキングが範型として機能していることも指摘できる。

最後に、使役構文は態の下位タイプ(使役態)である。言語によって、使役態が適用態、受益態、受動態、中動態のいずれかと共通する標識を用いる等、重なり合いながらも対立する態の体系を形成していることも使役構文の重要性を示している(Washio 1993; 鷺尾 1997; Hemmings 2013)。

上述のような多面性を備えた使役構文の分類は、研究の初期の段階では、主として形式的側面から行われてきた。例えば、「語彙的使役、形態的使役、

## 第6章

# 言語の多様性を探る言語類型論

### 6.1 言語の多様性を見る

本論では、言語類型論の方法論や研究事例を紹介しながら、認知言語学と関連する点や探求すべき点を挙げていく。認知言語学のアプローチは、人間の知覚・感覚や行動の根本的な部分と言語行動や言語の文法の間に関係のつながりを求める。つまり、言語が完全に人間の心情から分離したものではなく、両者の間に関連性を持つと考える。例えば、「バイトでお金を稼いで、本を買って、読んだ」の表現は、行動が時間的順序に従って線的に表現されている。この文における線の順序は単なる偶然ではなく、実際の行動の時間的順序に明確な関連性があると考えられる。また、「私がタクシーに乗った」と1人称単数である「私」が主語の文が、「タクシーが私を乗せた」という3人称単数のモノが主語になる文より自然に感じるのは、人間を主体とする文法の原理が働いていると説明する。認知言語学では、日本語のみに注目するような、1つの言語に着目するものや、日本語と英語、日本語と韓国語のように、2つから3つの言語を深く対照することで言語の文法内に存在する認知的枠組について論じる対照研究が多く見られる。

認知言語学は、母語でない外国語を学んだり、話したりするとき、何らかの認知的な側面や人間主体の考え方を想定する。つまり、人間の話す言語に共通の文法感覚が存在し、外国語習得の際にそれを利用することができる。また、日本語や英語ではない、世界のどこかの少数言語において観察される、珍しい文法的特徴が出現した際、なぜそのような文法が可能なのか、そしてそれは認知の点からどう説明できるのか、又は説明できないのかについて知見を与えることもある。認知言語学の手法で発見された文法の特徴は、部分的にも言語普遍性へアプローチできるものと考えることができ

## 第7章

# 進化的視点から見る言語

### 7.1 言語に対する進化的視点

本章では、言語の多様性を探る方策として、言語に対して進化的な視点を持つことを提案する。進化的な視点とは、言語は常に変化するものであり、多様に変化する可能性を持っているから、言語・文法を捉えるには、言語がどのように発生するかということと、言語がどのように広がるか・伝播したかを念頭に置いて(つまり、人類の移動や伝播も考慮に入れて)、言語の文法について取り組もうという態度である。進化的視点から認知言語学との接点を探り、類型論的研究の成果を示しながら、課題を明らかにする。

人間の進化・言語の進化について考える前に、人間以外の言語について触れる。人類の言語の起源については、自然言語に注目するのではなく、人間以外の動物、つまりチンパンジーやイルカ、ジュウシマツなどを研究対象にすることで明らかにしようとする研究がある。イルカについては、Herman et al.(1984)の研究がある。Herman et al.(1984)では、イルカに人間とのコミュニケーションの手段として、簡潔な文を教え、どれくらい理解しているかを調査した。ジュウシマツについては、岡ノ谷(2003)による小鳥が歌う歌についての研究がある。ジュウシマツの歌(鳥の鳴き声)は複雑であるが、その中に構造があることを主張し、岡ノ谷はそこから人間の言語との共通点と相違点をまとめ、自然言語の起源の研究への端緒としようとしている。他にも、霊長類の観察・実験を通して、コミュニケーションの観点から言語の起源を探る方策として、人間以外の霊長類(サル、チンパンジー等)の行動や振る舞いから言語習得のヒントを見出そうとするものに、Tomasello(2003)を中心とした研究がある。いずれの研究も、動物の言語や非言語的なコミュニケーションを通し、人間の言語やコミュニケーションとの共通点や相違点を明らかにしようとしているが、その共通点の部分に「再帰性(recursion)」